

On Fakaalofa : Reciprocal Exchange on a Small Island in the South Pacific

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3388

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Fakaalofa 考

——南太平洋小島嶼社会における互酬的交換——

馬 場 優 子

I はじめに

ポリネシア地域の日常生活の中できわめて高い頻度をもって使われている概念に *fakaalofa*, *alofa*, *aloha* 等がある。これらは島嶼により若干の表現の差異はあるものの同一語源で、意味・用法に違いはない^①。本来、この語は親子、キョーダイをはじめとする同一親族集団内の人々の間の規範的行動に関わる概念であったが、現在、公用語の英語^②では“love”と訳されている。また、十八世紀から十九世紀にかけて到来し受容されたキリスト教新教の福音では“affection”“charity”“pity”“compassion”“grace”等「愛」に関連する語が豊富に使われているが、これらも基本的には *fakaalofa*, *alofa*, *aloha* 等に置き換えられている。従って現在、キリスト教および教会活動が生活のすみずみにまで浸透している彼らの生活において、ポリネシア語を使う時は *fakaalofa* 等の語が満ち溢れているといつてよい。

しかしこれら *fakaalofa* 等の概念はキリスト教の教える「愛」概念とは厳密に言えば異なっている。では福音の教える「愛」とはどういうものであろうか。

新約聖書のきわめてユニークな特色としてさまざまな「愛」の中でも「アガペー」が使われている頻度が非常に高い。新約聖書以前にはほとんど用いられていなかったアガペーだが、新約聖書には頻繁に出現する事実から、レオン・モリスはアガペーを新約聖書に特徴的な愛を表す言葉であると述べている^③。アガペーは主体によって自由に規定された行動であり、相手の反応に影響されない決断的行動である。自分に善を施してくれない相手にも善をもって対処する、いわば見返りを期待しない行動である。その本質は自己犠牲であり、競争的意志や利害関係とは無縁の愛の姿をとるという^④。

ポリネシアの人々はこのような本質をもつキリスト教の「愛」概念を借用するに際して伝来の *fakaalofa* 等の語をあてた。彼らは福音の「愛」を本質的には異なる *fakaalofa* 等として受容したのである。

福音のアガペーに対してポリネシアの *fakaalofa* 等の概念を明らかにしたうえで、ポリネシア社会において依然として伝来の *fakaalofa* 等の概念が不可欠であり、福音の「愛」概念が受け入れられていない社会文化的文脈を明確にすることが本稿の目的である。

8000 島とも言われるポリネシアの島嶼のなかでも、比較的新しく生成された火山島を中心とする島々は高島で、水資源が豊富で土壌も豊かである。それと比較して環礁島 (atoll) や隆起珊瑚礁島は低島で、水資源に乏しく、島の陸表面をおおっている土壌が薄くて生産力が相対的に低い。生産力の比較的高い前者の型の島嶼社会はより大きな社会に組織化されて首長層を生み出し、特にタ

ヒチ、ハワイ、トンガでは高位首長どうしの土地をめぐる覇権争いがヨーロッパ人の到来によって刺激を受け、首長制 (chiefdom) への道を開いたが、後者の社会は高次の組織化は起こらず実質的に無階層のままヨーロッパ人との接触を迎えた。しかし現在、前者の型の社会も後者の型も地域コミュニティが人々の生活世界であり、階層化の有無にかかわらず、双系出自制に基づく親族組織と親族集団による土地保有制を基盤として成り立つ、いわば共通の社会組織を生きている。

本稿が対象とするのは後者のタイプの隆起珊瑚礁島ニウエである。刊行・未刊行の文献資料の他、1990年代より筆者が行っている同島でのフィールドワークによる一次資料を用いた。

Ⅱ ニウエ社会存立の基盤

現在、ニウエ島は13の行政村落から構成され、それぞれの村落は複数の親族集団から成り立っている^⑤。ニウエ人はそのいずれかの親族集団の成員として誕生する。彼らは親族集団を1本の大樹の比喩“a family tree”で表し、原発の始祖を根元としてその幹から次々に枝葉を伸ばすものと考えている。その樹の、どの大枝の、どの小枝に生まれたか、すなわちどの家系のどの位置に生まれたかがニウエ人個々人のアイデンティティの源となる。

親族集団は土地所有体である。根元となる原発の親族集団が所有する大地積は幹から枝が分岐するたびに分化され、枝葉の集団は細分化された地積を第一次的に所有することになる。従っていずれの親族集団もなんらかの土地の所有体であるから、いかなるニウエ人も様々なレベルにおける土地所有団体の一員であり、帰属する集団の土地に土地権をもつ。島に土地権をもたないということは所属する親族集団をもたないことを意味し、ニウエ人としての条件を失っていることになる。土地所有はニウエ人のアイデンティティの不可欠部分なのである。

ニウエ人のアイデンティティの基底部分を成している家族・親族集団と土地保有は、それぞれ生産・生活のための組織及び手段とすることができる。この組織と手段をもって如何なる原理によって人々は生産し、生活しているのであろうか。その鍵概念が *fakaalofa* 原理であると考える。

1. 樹の枝

ニウエ社会の基本的な社会集団は双系的親族集団 *magafaoa* (*maga*: 部分, 分岐部分, 支流。 *faoa*: 人々) である。*magafaoa* システムはニウエ社会の社会的, 経済的, 政治的, 宗教的, 心理的等全般にわたる土台を構成しており, 人々の行動, 価値観や規範を規定している。個人の名誉は帰属する *magafaoa* の名声や尊厳を反映し, 政治的, 社会的地位に作用する。自己がどの *magafaoa* に帰属するのかを認識せずにニウエ人として存在することは不可能といってよい。

magafaoa は英語に置き換えて言う場合, “family”を使う。だが, 集団そのもの, および個々の家族員を指示するという点では両者は共通するが, *magafaoa* は小家族のみならず拡大家族, さらに多くの小家族や拡大家族を包摂するいかなるレベルの親族集団をも表すという点で大きな差異がある。また厳密には集団構成に至っていない, 系譜上の関係をも指す。各個人のアイデンティティは, どの *magafaoa* 集団に帰属するのか, family tree の中でどの位置を占めるのか, すなわち他のどの *magafaoa* との関係でどこに位置付けられるのかによって得られる。

固有に family tree を指す語に *mataohi* (*mata*: 目, *ohi*: 子孫) もある。これは過去のある祖先から出自した子孫および現在の *magafaoa* 構成員を指し, さらに彼らの過去から現在に至るまでの系譜および系統をも意味する。土地紛争を処理する土地法廷^⑥では過去へ四世代遡及すればよいが, 実際にはたいいていの人は親からの口頭伝承によりさらに遡及した系譜を知っている。彼らは *maga-*

faoa を通してはるかに遡った祖先と時間を超越したつながりを認識しているのである。

彼らは、過去は現在および未来にしっかりと根を下ろし、人々（子孫）の生活に大きく作用しているという観念をもっている。彼らにとって祖先は過去の人ではないのだ。自己の *mataohi* の全ての人——過去の、現在の、そして未来に登場するであろう——の参与と相互作用が継続すると考えている。Vilitama によれば、往時、*magafaoa* の中にも優勢なものと弱勢なものがあったという。怠惰な人間 (*teva*) や泥棒 (*kaiha*) を出した系統は軽蔑されたが、首長 (*iki*) を輩出した系統 (*mataohi iki*)、戦闘における勇猛な戦士 (*toa*) を輩出した系統 (*mataohi toa*)、有名人 (*talahaua*) を出した系統 (*mataohi talahaua*) などはすぐれた高位の *mataohi* とされて重んじられ尊敬された^⑦。このように過去において *magafaoa* の祖先が如何なる手柄をたてたか、あるいはたてなかったか、功績を残したか残さなかったか、それが *mataohi* の格を決めた。従ってルーツを知り、過去の偉大な人物との系譜的つながりを見出せば、自己の大きな誇りとなり、また現在の自己の行為や功績が未来の自己の *magafaoa* の子孫にとり、誇りとアイデンティティの一部となる。彼らは *magafaoa* へのアイデンティティを通して過去と未来を認識するのである。

個々の *magafaoa* が時間経過とともに格の上昇・下降を繰り返す一方で、個々人の勇気、強靱さ、上昇志向によって *magafaoa* 内での個人の格が上昇し、首長や戦士になることもあった。現代においては往時のように戦いにおける武勇によって地位を上げるということはないが、コミュニティへ熱意をもって奉仕することによりコミュニティでの政治的地位を上げることができる。同時に *magafaoa* 内での地歩を確実なものとし、さらには帰属する *magafaoa* の格を上げることになる。

magafaoa 構成員団結の根拠は共通の祖先から出自したという血縁意識である。彼らのあいだでは “*Hohogo ni he toto e toto*” (Blood smells its own.) とよく言われるが、血のつながりによって何かが授受されていくという観念^⑧が血縁関係にある者どうしの結合を強める。遡れば共通の祖先に辿りつくことが分かっている者はどれほど遠い関係であっても同一 *magafaoa* から出自したという共祖意識によって繋がっているのである。

magafaoa 構成員は相互に自己の集団内における地位、それに伴う役割や責任を明確に認識している。各個人がそれにふさわしい行動をとることによって *magafaoa* 内の人々の絆や関係を確固たるものとし、*magafaoa* の集団としての形態と機能を維持しているのである。

magafaoa 組織内において個人の地位および役割は主として性と年齢によって分化している。社会生活の中心は成人既婚者 (*patu* : 既婚者, *matua* : 父母) である。結婚して子を生じてはじめて一人前の尊敬と名誉があたえられ、コミュニティの中心的役割を担う仲間に入れるのだ。“*Kia fakalilifu kehe tau patu*” (Respect the married people.) という言い習わしがあるように、安定性、力強さ、名誉、尊厳等の意味が *patu* や *matua* には付与されている。

patu たちがコミュニティの重要な活動の前に必ず相談し、助言を得るのが *tupuna* である。*tupuna* は *magafaoa* の祖先のみならず、*magafaoa* の (男女) 古老や祖父母をも指す。彼ら (の言葉) は現在と過去をつなぐ役割を果たし、人々に祝福や力をもたらす一方、制裁を加えることもあると考えられている。祖先、老人、年長者へは “*mahani fakalilifu*” (the respectful manner) をもって接し、無礼な言動はタブーである。

兄弟姉妹は他のポリネシア社会同様に生涯にわたってきわめて緊密な関係を維持し続ける。兄弟は姉妹に対して “*lufu mahakitaga*”, 姉妹は兄弟に対して “*lufu tugaane*” と呼ぶが、これは類別的キョーダイを含めた呼称である。この兄弟と姉妹は相互に最も敬意を表すべき関係にあるが、姉妹は兄弟に対して優位な地位にあるので兄弟の姉妹に対する尊敬度はきわめて高くなる。

男の姉妹は彼の妻よりも彼に対して権威を持ち、かつ、彼との物質的共有度が高い。往時、戦乱

に明け暮れていた時代に、男が突然戦いに駆り出された場合、彼の食べ物の残りを食べる権利は妻ではなく彼の姉妹にあったという事実がそれを物語っている。また姉妹に関する仇討ちは兄弟の役割であり、夫は妻に対してその義務はない。このように血縁関係が婚姻関係を凌ぎ、*magafaoa* の一体性、共同性はきわめて強力であると指摘できる。

magafaoa 構成員はすべてこうした地位のいずれかに位置づけられ、互いに責任を担いつつ、その地位に相応する行動をとることが期待されている。日常の「食」や「住」は基本的には小家族が単位となって営まれているが、実質的には日常生活の諸相において小家族を超え、*magafaoa* 内で財や労力の相互提供が行われるなど *magafaoa* の共同性が顕著に見られる。一方、通過儀礼その他の儀礼においては *magafaoa* が一体となって取り組む。共同労働あるいは食糧や物資の集積に各自が相応の役割を担い、儀礼が首尾よくいくよう貢献することが期待される。そういう時が集団の外部に対して *magafaoa* の結束力や一体性を誇示し、*magafaoa* の能力、繁栄、成功を示す機会となるのだ。同時にそれは *magafaoa* 全体に達成感、成就感を与え、構成員間の絆をいっそう強めて一体感を再確認することになる。

1960年代から島民のニュージーランドへの出稼ぎ移出が増加してきたが、移住先でも同一 *magafaoa* の者はほぼ近隣地区に集住している^⑨。これは *magafaoa* の共同性を島外においても貫いていることを表しているといえよう。

2. 地の虫

“*Ko au koe kelemutu he kekelekele*” (I am the worm of the soil.) という文言がしばしば聞かれる。*kelemutu* (地の虫) は「土地の真の所有者」の隠喩である。「ニウエ人は「地の虫」である」の意味するところは「ニウエ人が(島の)土地の真の所有者であり」、「土地の真の所有者はニウエ人である」ということを意味する。これはさらに(島に)土地を所有していなければニウエ人ではないことを示唆し、ニウエ人のアイデンティティが土地所有を通して確立されることを示している。

土地は *magafaoa* の所有であり、*magafaoa* 内で超世代的に使用権が双系的に継承されてゆく^⑩。売買することはできない。単なる物品や商品ではないのである。土地は祖先と子孫を繋ぐものであり、土地を通して祖先は生きていますと考えられている。

彼らの伝統的信仰によると、祖先の靈魂は *magafaoa* の土地に今なお生き続けている。その土地で祖先たちは労働に励み、生活を営んだ。祖先たちの眉から落ちた汗水が今、子孫たる *magafaoa* の人々に豊富な収穫物を与えてくれるのだ。このように、彼らは祖先から受け継いだ土地で働く時、常に祖先たちがこの地で額に汗して働いたことに思いを馳せる。彼らは、その土地に関する権限は祖先の靈魂にあり、現在、土地を利用している彼ら子孫はその土地を管理しているだけであると考えている。従って土地を売ることは祖先の靈魂を売ることを意味し、決して許されないことなのだ。

そればかりではない。他の *magafaoa* の土地を無断で横断したり、その土地に生るものを盗むと、その地に住む靈魂が怒り、犯人を追いかける。やがて事故その他の災難が起こり、犯人は死に至ることもある。そのようにして祖先の靈魂は正しい土地の所有者を守ってくれるのだ。

土地にかかわる超自然的信仰はニウエではごく一般的に見られ、依然として重要な意義を失っていない。ここで *fono* と言われる侵入および接近の禁止を表示する物体を三種あげておこう。いずれもプッシュでひときわ目立つように作られた人工物で、それを無視して侵入すれば災難を招くと考えられている^⑪。

(1) *fono mate* (*fono*: 禁止, *mate*: 死)

その地が死者を出した *magafaoa* の土地であり、*tapu* (禁忌) すなわち侵入禁止であるこ

とを示すもの。ココナツ葉を特殊な結び方をしておいたり、木片に“fono mate”と書いて樹に打ち付けておいたりする。tapu の地を侵すと災難を招くと言われる。通常の死の場合は12ヶ月くらい tapu が続く。溺死の場合は期間がより短く、その死があった海辺が tapu の地となる。

(2) fono fakakona (fakakona : 禁止)

自己の土地を特別に他人の侵入から保護する時に置く。果実の生っている樹を熟すまで守る時など。taula-atua (呪医, 呪術師) が作る fono で, taula-atua が取り除くまでその土地への侵入は固く禁じられている。これを侵すとさまざまな災厄が起こり, 時には死を招くと恐れられている。

(3) fono

最も一般的な侵入禁止サインで, 超自然力はあまり強くない。自己の土地権があると信じている土地を他の者が使用しているのに気づいた時に表示する。ココナツ葉をブッシュの目立つ木に結びつけた簡単なものだが, この警告が無視されると緊張関係が高まり, 土地法廷に持ち込まれることもある。

このようにニウエ人にとって土地は単なる物質ではなく, 祖先の靈魂の住まう聖なる場所として売買することは厳禁である。

ヨーロッパ人と接触する以前には土地はさまざまな手段で獲得された。戦争の戦利品として, 贈り物として, 境界線の恣意的・非恣意的変更, 等々柔軟性に富む土地と人間の関係が見られた。それらは文字による記録ではなく, 人々の記憶と口頭伝承のみが根拠であった。当然, 土地を巡る紛争は生じやすく, 部族間や各レベルの magafaoa 間で大小の戦争や紛争が日常的に起こっていた。そしてその解決も戦争によってなされた。

キリスト教とヨーロッパ文明の到来後, 土地紛争を戦争によって解決する時代から法廷を通して解決する時代に入ると土地所有関係が文字記録として残るようになった。法廷では記録された事実が記録されていない事実よりはるかに重い意味を持つ。相続・継承方式は宗主国植民地政府により規定され, 土地の境界線は固定された。このことにより各 magafaoa の人口規模と土地その他の自然資源のバランスを自ずと保っていた柔軟な土地保有制度は姿を変えてゆく。新しい土地法による継承方式では双系継承方式そのものは変わらなかったが, 土地利用実績等、伝来の方式においては重視されていた血縁関係以外の条件が弱められ, 血縁関係のある子孫であれば土地権継承の可能性が付された。

だが幸運なことにニウエはクック諸島等と異なり新しい法制度の実施が厳格に行われることなく時間が経過した。そして1969年施行の近代土地法の時代を迎える。各 magafaoa は leveki magafaoa (leveki : 受託管理者) を指名して土地の管理者とし, magafaoa 構成員は確保された magafaoa の土地を双系的に継承してゆくことになった^⑩。

この過程で大きな問題になったのは在外ニウエ人の土地権に関する「20年規程」である。1960年代より南太平洋の諸島嶼国から周辺先進諸国への大量の人口移動の波にニウエも乗り, 主にニュージーランドへ多くの島民が流出した。彼らの中には老後は帰島の意志のある者, 本人は帰島するつもりはないが子どもを帰島させる意志のある者, 全く帰島の意志の無い者, 等さまざまなニウエ人がいたが, はからずもこの問題を契機に帰島の意志の有無にかかわらず, 彼らが如何に島の土地をアイデンティティの基盤にしているかが明白となった。

「20年規程」とは1964年にニウエ議会を出された案件である。当時, 土地権と土地に関する発言権を持ちながら在外居住を続けているニウエ人の土地が島の経済発展を阻害していることが指摘

されていた。彼らの放置された土地の有効利用が法的にきわめて困難なのである。この解決策として提案されたのが、20年以上島外に居住している者は自動的に島の土地権を剥奪されるというものであった。

これに対して在ニュージーランドのニウエ人はニュージーランド各地で集会を開き、「20年規程絶対反対」の意見を持って代表を島に派遣してきた。ニウエ、ニュージーランドそれぞれで喧々諤々の議論が起こり、結果的にはニウエ議会はこの案件を廃案にした^⑩。

独自の産業もなく、国家予算の大きな部分をニュージーランド政府の援助に負っている^⑪この社会にとりニュージーランドで働く親族からの多額の仕送りは重要な財源である。そして一方、在ニュージーランドの親族たちは仕送りによって *magafaoa* 構成員としての地位が保障されるものと考えていた。

双系出自制の下では土地権は両親もしくは片親から継承する。その土地権を失うことは *magafaoa* 構成員としての地位を失うことを意味する。元来、ニウエの出自集団は土地との関係で規定され、その逆ではない。つまりある出自集団の成員は誰で、従って彼（女）はどの土地に権利を持っているのか、ではなく、当該の土地に権利を持っているのは誰かによって出自集団が規定されるのだ^⑫。従って土地権を失うことは *magafaoa* 成員権の喪失を意味し、在外ニウエ人のアイデンティティの危機を招きかねない。

「20年規程」の廃案により、ニウエの現今の近代土地法の下では血縁関係を第一義的に優先する土地保有制が存続しており、親族集団と土地権の織り成す深い関係が依然としてニウエ社会の基盤を成している。

Ⅲ *Fakaalofa* 理念と互酬性

人々の社会関係に高い価値を置く社会では人々が現実的に関係を表現し、維持することが重要である。頻繁に接触・交流し、生活資源を分かち合い、労働力や人手が必要な時には気軽に依頼もしくは申し出る。その他、有形・無形の援助をするなどの相互交流が不断に行われ、こうした社会の人間関係の特色が直接接触的であることを物語っている。

ニウエの場合も日常的にこの種の交流が行われ、しかもそれらの行動を思いやりや寛大さをもって行うことが当然とされる。そうしたニウエ人の内的本質が表現されたものが *fakaalofa* で、そこに彼らの価値観が象徴されているといつてよい。

* *Kua fakaalofa e tama ke he haana a tau mamatua.*

(The child loves her parents.)

fakaalofa の気持ちや感情は他者に具体的に何かを与えることによってのみ表現することができる^⑬といわれる。この場合、与えられるものは食物その他の贈物のみならず手間貸しや手助け等の労働貢献も対象となる。加えて、「与える」という行為そのもの、与える態度やその背後にある動機、さらには他者に与える性向のある者をも *fakaalofa* という。

* *Ko e fakaalofa a nā ne tamai he magafaoa.*

(That's the gift from the family.)

* *tagata fakaalofa*

(a person who gives or shows love)

またこの語は挨拶や握手など身体動作によって *fakaalofa* を表現することを、さらにそうした表現そのものをも指す。

**Fakaalofa lahi atu ki a koe.*

(Great love to you. Hello. Greetings to you.)

**Fakaalofa mai e lima haau.*

(Give me a handshake.)

このように *fakaalofa* は「愛」に関連する意味を全般的に表現する複合的概念であるが、元来は親子・キョーダイその他親族間の感情を表すものであった^⑩。彼らは *fakaalofa* の感情に基づいて財、労力その他のものを与えたりもらったりするのだ。従ってそこで行われるやり取りは分かち合いであり、損得計算は念頭にない、と考えている。気前のよい財のやり取りや手間の貸し借りは親族行動の最重要事項である。特に血縁関係の近い親族どうしは日常的に頻繁に分かち合いとやり取りを行ない、親族紐帯の確認、再確認と維持に努める。やや遠い *magafaoa* とは通過儀礼等が *fakaalofa* 実践の機会となる。

1. 日常生活における分かち合い

キリスト教受容以前にはいくつかの小家族から構成される *magafaoa* はブッシュに住み、土地保有単位として基本的社会集団を成していたから、生産労働も共同で行い、生産物は *magafaoa* 内で相互に分かち合っていた。ヨーロッパ人との接触後、生産、再生産、消費の基本的単位である世帯は縮小した。

現在、生計活動を共同にする世帯は基本的には一つの家屋に住み、共に食事をする人々から構成される。そのメンバーは理念的には夫婦と未婚の子どもから成る小家族だが、成長、婚姻、高齢化、死その他により常に転変する。また養子や里子を迎えることもあるし、親族が短期あるいは長期にわたって逗留することも頻繁に見られる。双処居住制をとっているので新夫婦は夫あるいは妻どちらかの実方の土地に居を定めるのだが、夫妻いずれの土地を選択するか決めぬまま片方の親元に同居を続けたり、夫方、妻方の実家への同居を交替で繰り返したり、あるいは実家近隣の空家に暫定的に住んで親と生計を共にするなど、現実の世帯構成員は安定したものではない。

そうした状況ではあるが生計活動を共同にしている単位を一つの世帯として考えてみると、世帯が互酬的交換が行なわれる最小の単位であると見なすことができる。

マリノフスキーは「家族」（本稿でいう「世帯」）内部の贈与交換は無償の、見返りを期待しない「純粋な贈与」であると考えた^⑪。しかし「家族」内で個々人は自己の持てるすべての資源、技術、エネルギーをもって属する世帯の福利に貢献するよう期待されている。そしてまた世帯内の他の構成員からの貢献と言う恩恵をこうむるのである。性および年齢により役割の異なる者の間の互酬的交換でなくて何であろう。

こうした世帯内の分かち合いをサーリンズにならって“pooling”としておく。サーリンズは pooling と再分配 (redistribution) を同義的に考え、互酬的交換と対置させた。後者は社会経済的に利害の明確に異なる二者間の可逆的な運動で“あいだの関係” (a “between relation”) であるが、前者は“内部の関係” (a “within relation”) であると規定している。そして pooling は、一見すると

互酬的交換とは無関係の運動のようだが根底には互酬性があり、互酬性が組織されたもの、互酬性のシステムであると述べている^⑩。pooling ないし再分配という経済過程には何らかの程度の中心性を構造上必要とするというポランニー説^⑪をサーリンズも採用しているが^⑫、両者ともに、明確な社会的中心点を有する首長制や家父長制家族等ばかりでなく、狩猟採集民社会のバンドや小農民の家族等近代化以前の世帯にも pooling ないし再分配というメカニズムを適用している^⑬。本稿では財が集中する部分が特定化されず変遷する無尽講のようなものも含め、集団の成員から集めその集団の内部で再分配するシステム一般を pooling とする。

同一世帯内の分かち合いが pooling であるとして、世帯間の分かち合いは何であろうか。異なる *magafaoa* に属する世帯どうしは相互に異なる利害関係にあることは明瞭であるからサーリンズの言う互酬的交換に相違ないが、同一 *magafaoa* に属する別世帯に関しては単純化できない。入れ子構造の *magafaoa* システムのいかなる「枝」に互いが位置づけられているかに拠る。すなわち *magafaoa* の分岐点の共祖が現時点にきわめて近い場合は別世帯であっても pooling 的運動がより強く見られるといえる。

日常的な互酬的交換が最も頻繁に行なわれるのは相対的に近い時点で枝分かれした *magafaoa* の世帯どうしである。集落内での居住地が近い者との交流がより多いことが指摘されるが、そうした間柄は耕地もかつての居住地も近接していたことを示し、そのことはとりもなおさず比較的近過去の段階で *magafaoa* 共祖を分かち合っていることを意味している。

日常生活の中では食物の交換が最も重要である。調理済みの食物の外、釣った魚 2、3 本、バナナ 1 房、マンゴー 2、3 個、狩ったハト、またココナツなどの生の食物もやり取りされる。食物の贈与を *momoi* と言い、珍しい食物は *momoi* によって分かち合うことになっている。基本的な消費財である食物の互酬的交換を通して親族間の連帯意識はより強化されるといえよう。

2. *Magafaoa* と互酬的交換

人生儀礼には出生祝、満一歳の誕生祝、女兒の *hukiteliga* (ear-piercing 儀礼)、男児の *hifiulu* (hair-cutting 儀礼)、満 21 歳の誕生祝、結婚式、葬式がある。このうち出生祝と満一歳の誕生祝はやや小規模に行われるが、その他は盛大な儀式と宴会



結婚式の宴会の準備をする女たち



宴会のための umu 料理を作る男たち



結婚式の宴会で新郎・新婦の前の長い布の上に祝
い金が投げ込まれる

が開かれる。

まず結婚式を見てみよう。宴会には親族や姻族ばかりでなく村中の人が、さらには知り合いの他村の人もやって来る。彼らにふるまう大量の調理済みの食物を準備するのは親族集団 *magafaoa* の人々だ。樹木の比喩で言えば根元を同じくする *magafaoa* が協力する。数日前から共同作業によって作る食物もあり、種類別に分担して各家で作り、当日持ち寄る物もある²⁹。宴会に参加する者すべてが十分に食べても有り余るほどの食物が用意され、残った食物は、各自が用意してきた、あるいは主催者が用意したココナツの葉で編んだバスケットに入れて持ち帰る。

往時は *tapa* (樹皮布) や編み物細工を主催する世帯に贈ったが、現金経済が浸透した現在は専ら現金を贈る。結婚式の宴会では長い布 (*pereu*) の一方の端を新夫婦が持ち、他方の端を彼らの親が持つ。そのたわみの中に参会者が現金を投げ入れる。これは新夫婦への *tafatofa* (blessing) の贈物で、かなりの高額(例えば数千ドル)になることがある。この祝い金は“*Ke fakatu aki e nave*” (For you to stand on.) という意味を持ち、新夫婦がこれから新家庭を作ってゆく基盤を提供するための贈物である。

男児が出生後伸ばし続けた髪を短く切る儀礼 (*hifiulu*) と女兒の耳たぶに穴を開ける儀礼 (*hukiteliga*) は、元来は成年儀礼を意味した。現在は5歳から18歳の間のいずれかの時期を家族の都合に合わせて選び、行う。どちらも村全体を巻き込み、他村からも多くの参加者が集まる、華々しい儀礼である。

式の手順はどちらにも共通している。当該 *magafaoa* の長老が司式者となり、村の教会の牧師、数人の *magafaoa* メンバー、その他 *magafaoa* のつながりのある人々が次々に演説をする。続いて牧師が当の子どもに祝福を与えた後、*hifiulu* の場合はその少年の *magafaoa* メンバーたちが呼ばれ、順に少年の髪を一房ずつ切ってゆく。*hukiteliga* では母親が少女の耳朶にピアス用の穴を開ける。

これらの儀礼で重要な部分は演説ならびに断髪もしくは耳朶開けに続いて行われる贈物の交換である。*magafaoa* の人々ををはじめ、親しい友人、知人も贈物を携えてやって来る。現在、こうした贈物は現金である場合が多い。一方、当該 *magafaoa* は贈物に対する返礼のために屠殺したブタ、鶏 (現在はニュージーランドから輸入した冷凍物)、コーンビーフ大型缶、茎付きタロイモ、茎付きヤムイモ、袋詰めクムラ (サツマイモ)、近海で釣った大型の魚、房状バナナなどを大量に準備する。

贈り主とその金額は厳密に帳簿に記録され、贈られた金額に応じて返礼がなされる。贈られた金額のランク別に分けられた返礼品セットの山が会衆の目の前にたくさんつくられ、贈与者は名を呼ばれてどの山が自分への返礼かを知る。この返礼品の配分に費やす時間はきわめて長い。この間、



Haircutting 儀礼の時の返礼品セットの山



返礼品の分配を見守る人々

贈与者は非常に緊張した面持ちで自分の名が呼ばれるのを待っている。自分が贈った分に見合う返礼があるか、期待しただけのお返しがあるか、不安と緊張の時間である。祝い金は出さないが集まった参加者も誰一人立ち去ることなく、分配の成り行きを見守っている。誰がどれだけ贈ったかを互いに知っているのも、主催者がそれにどれほどの返礼をするか、皆、興味津々である。贈与に対する返礼にいささかでも過ちがあれば、たちまち噂が広がり、*magafaoa* の評判がおちる。習慣通りのものを習慣通りに返礼しなければならないのだ。

この日の準備のために収穫時期を考えてタロイモやヤマイモを植え付け、ブタの肥育をし、鶏やコーンビーフ等の輸入品調達のために貯蓄をせねばならない。準備のために家族は数年間を要するほどだ。従って子ども全員に行くのは稀有で、通常は長女と長男にのみ行う。

集まる祝い金はかなり多額で、準備のために使った費用を差し引いても余剰が出る。手に入った大金は、子どもが島外で高等教育を受けるための費用や家族のニュージーランドへの移住費、自家用車の購入費などのために使われる。

こうした冠婚葬祭における *magafaoa* メンバーの贈与に対し、その一部返礼は当日清算の形で宴会に招き、上述のような種類の食料品のお返しをするが、この交換によって親族間の贈与交換が完了するわけではない。各世帯が準備しうる最大限の努力をしても家により返礼に若干の差が生じる。*magafaoa* 内の各世帯で順次、儀礼が行われるたびに人々が贈与をし、返礼されるが、その都度の贈与、返礼のアンバランスにより生ずる負い目を順に引き受けつつ贈与交換を繰り返してゆく。この連鎖が人々を結びつけ、親族集団の結合を強化あるいは創造したり再確認したりするのだ。ここでは親族集団内の世帯間である時間間隔の中でレヴィ＝ストロースの言う一般交換が行なわれていると見なすことができる。

3. 牧師への *fakaalofa*

fagai 制度にも *fakaalofa* 原理が見出される。これは、村落の人々がグループ化され、グループが交替で村の教会の牧師に食糧その他の生活必需品を提供するシステムである²⁹。その区分された集団をも *fagai* と言い、かつては労働と祈祷の単位であり、村での共食の単位でもあった。

この制度の形成過程は以下の通りである。キリスト教が導入され、島内沿岸部の各地に伝道所(後に教会となる)が作られた頃、人々は内陸奥地のブッシュに親族集団ごとにある程度の地域的まとまりをもちつつ分散居住していたので、礼拝のために遠距離を歩いて沿岸部に来なければならなかった。宣教師はそのため、伝道所のそばにいくつかの小屋を建てて複数の *magafaoa* が共同使用するように指導した。人々は土曜の夕方、ブッシュから出て伝道所のそばにやって来、安息日である日曜日の食事の準備をする。日曜は礼拝に出て夕方までその小屋で過ごし、ブッシュに帰って行くのだ。小屋は当時のニウエの伝統的なつくりである一部屋間取りで、そこを数家族で利用し、食事を共にした。そのグループを *fagai* という。

fagai を構成するのはブッシュにおいて近接する土地を使用する数家族であった。耕地の近接性はいずれかのレベルでの祖先を同一にする *magafaoa* であることを示している。この *fagai* が、やがて人々がブッシュから出て教会を中心とした集落を作るようになってからも労働およびコミュニティ活動の単位となってゆくのである。

各 *fagai* は村の教会の牧師にタロイモ、ヤマイモ、ココナツ、バナナ、鶏、ハト、コウモリ、ブタ、ヤシガニ、魚などの食糧、衣類、寝具類の他、薪、家畜(ウマ、ブタ)の飼料、その他の日常用品、それに現金、土地など牧師が村で生活してゆくために必要な金品を分担して贈った。*fagai* 集団は牧師への贈与の多寡を競い合い、互いに他の *fagai* を打ち負かして名声を得ようと最大限の

努力をするようになった^⑤。現在は生活資料に代って現金を主体とした贈与を行っているが、各 *fagai* は金額を逐一記録し、常に *fagai* 間で寄付額の競争をしている。

牧師に贈与される金品を *poa* という。元来、これは食糧のみを指していた。牧師に *poa* を贈与する風習はキリスト教伝来のごく初期に始まったと言われている。当時、宣教師の乗船する John Williams 号が入港した時、島民がヤムイモを贈呈した。その後も John Williams 号の入港のたびに島内の各村からヤムイモが運び込まれた。これが宣教師への *poa* の始まり^⑥で、各村落教会の設立とともに牧師に *poa* が贈られるようになったといわれている。

現在、*fagai* が分担して定期的に贈る *poa* 以外に年一回の特別な *poa* が行われ、島の全村落の教会員が参加する。最終日には各村で集計し、全村落の代表が一村に集まって最多額を集めた村を発表する。それは村落対抗献金合戦の様相を呈し、子どもから大人まで他村を凌ぐために無理な献金をする。手許にある現金をすべて献金したり、資産の一部を売り払い、現金に換えて献金したりする者もいるという。集まった献金は各村ごとに三等分し、三分の一は牧師の生活費として贈与し、三分の一は海外の宣教師団へ献金し、残りの三分の一は島の行政府への寄付とする^⑦。

poa に加えて週二回行われる礼拝時には献金が行われるが、通過儀礼すなわち地位の変化やその他個人的な状況の変化があった時には通常の献金よりはるかに多額の献金をする。たとえば結婚後初めての礼拝の時には数十ドルから百ドルほど、その他子どもの誕生、病気の回復、事故、島外への旅立ち、島外からの帰国など長期の不在の後、葬式、*hifiulu*, *hukiteliga*, 21 歳の誕生祝の後、スポーツ大会での優勝、等々の時に特別献金が行われる。

これらは通常の礼拝の最後の賛美歌の後、祝祷が宣言される前に当該者が進み出て封筒に入れた現金を祭壇のテーブルの上の皿にのせ、その献金の理由を述べる。すると続けて他の人々も同じ皿に援助の献金をする。その後、教会の財務担当の長老によって献金者の氏名と金額がみなの前で発表される。

キリスト教伝来以前、*poa* は彼らの伝来の宗教の重要な部分を成す信仰と結びついた *fakaalofa* であった。彼らの伝統的信仰によれば成功も物質的恩恵もすべて *mana* に依拠していると考えられている。彼らは、神々——特に主神である *Tagaloa* (虹、空の神)、ニウエ島の始祖である *Fao*, *Fakahoko*, *Huanaki*, *Lageiki*, *Lagiatea* の五人の神々、その他各地域にいる土地の神々^⑧——から *mana* を得るために慰撫し、神々が住む場所とされている *mata fai tuga* (the sacred place)^⑨にて食物を供えた。

生産物の初物は神々および首長^⑩への供物となった。とりわけヤムイモの収穫時には感謝の儀礼 (*fakaulu ufi*) が行われた。初物のヤムを掘るのは生産者本人ではなく、別の人間でなくてはならない。ヤムは定められた収穫日まで収穫および食すことは *tapu* であり、初物のヤムを神々に供える儀礼を行った後に人々は自分の畑から収穫したヤムを食すことができた^⑪。

漁に関しても同様の儀礼が行われる。最初に獲った魚は *tapu* であり、男たちが少し食べてから首長と神々に捧げた。現在は漁の初物は村の牧師か老人に贈る。新品のカヌーで出漁した場合も最初に獲った魚は村の老人か牧師に贈る。この *fakaalofa* は、牧師や老人から *tafatofa* (祝福) を得ることを期待してのものである^⑫。

このように *poa* はキリスト教受容以前は伝来の神々に *mana* を授けられることを目的として捧げた供物であったが、キリスト教時代に入り、牧師を通して「神」から祝福と恩寵を賜うための供物となり、事実上は牧師に金品を贈呈するようになったと考えられる。

fakaalofa によって贈るものは文化的に意味が適切でなくてはならない。たとえばキャッサバは彼らにとって *poa* として不適切で、宴会にも出すべきではないし、他人へご馳走したりマーケッ

トで売のさえ恥ずかしいことである。また、パパイアは人間の食べ物ではなく、ブタの餌であるという。カニ類のうち、*uga*（ヤシガニ）や *kalahimu*（小型リクガニ）は良いが、*kalavi*（カプトガニ）は漁の餌用であり他人に贈るのは失礼だとされている⁹³。食べられる物のなかでも彼らにとって *fakaalofa* にふさわしいものを贈らねばならないのだ。

タロイモはよく生育した大きなものは *fakaalofa* にしてよいが、貧弱な質の悪いものは怠惰な人が飢饉の時に食べるものであり、他人に贈るのは失礼であるとされている。不適切なものを贈ると、作法の間違いと同様にただちに噂となり、嘲笑小唄が出来上がって人々の間に広まってゆく。

4. 競争的贈与交換

poa 競争に見られるように、*fakaalofa* による贈与交換には厚意を表すとともに相互に能力を試す競争的機会をも作り出すという別の側面が付随する。

毎年、最終土曜日の *Fakaau tau*（Thanksgiving Day）には、各村落で村人たちが教会堂の前の広場に収穫した作物や果実類、調理済みの食物（*umu*）を並べて展示する。教会の長老たちがこれらの収穫物を審査して最も大きなタロイモを収穫した者が表彰される。この祭りはその年の収穫に感謝の意を表し、翌年の豊作を願うものである。牧師の祝祷に続いて来賓の大臣が食物を祝福する挨拶を述べた後、村の寄り合いで定められたパートナーである家族どうしが収穫物の贈与交換を行い、さらにお互いのために用意したご馳走を出し合って宴会をするが、この時、互いに交換する収穫物とご馳走の質量の競争をする。互いに相手を打ち負かそうと興奮するなかを村の長老たちが両家族にほぼ同じくらいのご馳走を出すよう指示し、贈与と返礼のバランスがとれるまで交換を続けさせる⁹⁴。このパートナー関係は数年続く。最近では交換が終わったら、贈られたご馳走を家に持ち帰って食べるようになった。

一方、他村のパートナーとの競争的交換は毎年行われる村落対抗クリケット試合の時に見られる。ホスト村のパートナーがゲスト村から観戦にやって来た規定のパートナー家族のために宴会を催して大ご馳走でもてなす。相手の村で行う時も主客逆転して食物の質量を競争する。ただし最近では、やって来たパートナーと“生の食べ物”をそそくさと交換するだけで宴会は行われなくなった。

単純化していえば村落コミュニティ外との交換においてより *fakaalofa* の競争的側面が強くなるといえるであろう。往時、車が普及していず村落間の往来が容易でなかったころ、他村から知人や親戚が訪ねてくるのは珍しいことであったが、そのような時には次のような次第の儀礼が行われた。まずホスト村の人々は訪問者たちをダンスとご馳走でもてなす。その後、数時間、両サイドからのスピーチが代わる代わる行われ、最後にホスト側が相手を称える挨拶をしてから贈答品を列挙する。次に客人側が同様に称賛の挨拶をして返礼品を列挙する。両者とも相手の贈り物よりも少しでもよいものを贈ろうと最大限の努力をするが、スピーチでは自分たちの出した贈物を謙遜し、相手からの贈物を絶賛する。そして万が一、相手側の贈物が粗末であると、それは公表され、その行為を愚弄する歌がたちまちのうちに流行りだす⁹⁵。

5. 社会的制裁

ニウエ人の価値観の中枢に *fakaalofa* 精神が位置づけられ、他者に有形・無形の贈与をする行為が *fakaalofa* の象徴的表現であることを述べてきた。ニウエで社会生活を営むには *fakaalofa* をもってこの社会に参与せねばならない。これに反する行為をする者、あるいはこの行為に関して誤った態度をとる者は *tagata lamakai*（*lamakai*: to be mean, stingy）といわれるが、これは最も侮蔑的

な悪罵である。

tagata lamakai すなわち狭量や吝嗇の人は *magafaoa* の中でも他の人の支持や協力を得ることがむずかしく、社会的に孤立した状態に置かれる。個人的な拒絶や悪意あるゴシップの対象となり、妖術を向けられることすらある。そして結果として社会的地位を失うことになる。

前述したように、親族集団 *magafaoa* はそれぞれ性格特徴を持ち、その構成員はそれを共有すると見なされている。従って一個人の不適切な行為は親族集団全体の不名誉を招き、集団のステレオタイプとされて軽蔑の対象となる。それはまた、成員個々人の評価を左右するから、集団は個人の行動に対して寛容に放置せず、是非を示したり非難したりするのである。

ところで‘気前のよさ’に高い価値が置かれているからと言って、当社会の人々が性格的に寛容なわけではない。‘気前のよい’ことが社会の美德として共通認識を持たれていても、空腹であれば他の人より多く食べたいであろうし、希少な物は許されるなら独り占めしたいと思う者がいてもおかしくはない。こうした状況の中で個人が行いうるのは、他の人の目に触れない所で独り占めしたり、より多く食べたりすることだ。つまり自分が手にしたものを他の人に見せない、知らせない、隠すということである。一旦、他の人の目や耳に入ったら、“使ってよい”“食べてよい”というメッセージを示していることになるのだから。しかしこのプライバシーのほとんどない社会では、運よく隠しおおせたと思っても誰かに見られていて、*tagata lamakai* の汚名を着せられることがしばしば起こる。

このような社会では個人的に目標を決めて貯金をするなどのことは困難である。収入、所持金その他プライバシーのすみずみまでお互いに熟知しているような当社会では、「持てる者」のところへ必ず誰かが借りに来るから貸さざるをえない。そして貸した金品を「返してほしい」とは絶対に言えない。*tagata lamakai* という評判が立ってしまうからだ。海外出稼ぎや商売によって小金を貯めても、「気前よくあるべし」という社会的規範の前には、貯めたものも親族たちの懐に入るか、教会への献金や寄付に消えてしまうか、だ。社会は親族集団やコミュニティの人々との共同性を通して個人の欲求や目標を達成することを期待している。個人的利益追求は美德とは見なされず、集団としての目標追求に価値を置いているのである。

Ⅳ 結 論

fakaalofa は思いやり、気遣い、同情などから発する態度で、それは理想的には親族間で当然のこととして期待され、有形・無形の贈与をするという行為によって表現される。

最小単位的生活共同体である世帯は、夫婦と子ども、もしくは系譜的にも血縁的にも最も近い者から構成されるが、この集団内部においてはメンバーはそれぞれの性、年齢、能力に応じた役割を遂行することによって共同生活を成り立たせている。ここでの有形・無形の贈与・貢献は集団全体の中に貯えられ、全員が恩恵に与る。ここでは個人は利害関係の明確に異なる単位ではないから、個人間の贈与交換とは言えず、むしろ pooling と言うべきであろう。この pooling は、将来、何らかの形で恩恵をこうむるであろうという、漠然とした返礼期待を前提としたもので、サーリンズの言うように根底には互酬性が存する。

世帯を異にする同一 *magafaoa* の者どうしの親族行動においては *fakaalofa* は返礼を当然のことと期待して行われる。日常生活における財の贈与交換や労働力の貸し借りを始め、通過儀礼、人生や生活上の重大な事態に陥った時には、同一 *magafaoa* 成員は「大枝」、「中枝」、もしくは「小枝」が異なる場合でも相互に財や人力の供与を惜しまない。これは親族関係を越え、村落コミュニティ

レベルでの互酬的交換にも拡大される。

以上、*fakaalofo* は本質的に互酬性を前提とする。この点でキリスト教の「愛」すなわちアガペーとは異なるのである。

ニウエ人牧師 Afele Paea は、親子、キョーダイその他ごく親しい人々の間の態度として使っていた *fakaalofo* 概念を拡大して一般的な「愛」を指し示すようになったのはキリスト教の受容を契機とする、という^⑤。

キリスト教導入以前はニウエの人々は常時、潜在的・顕在的に戦闘状態にあり、親族外に拡大された「愛」を受け容れる余地はなかった。宣教師の誘導により沿岸部に村落を作り、定住するようになってから、キリスト教の「愛」を学び始めたという。初期の宣教師たちが不慣れな土地で人々の間に入って生活し、さまざまな艱難辛苦に耐えつつ、島の人々に聖書や賛美歌のみならず家の建て方、家族のあり方、村落生活の送り方等々を教えるという彼らの生活や行動を目の当たりにして、ニウエの人々は宣教師たちの中に一般化された「愛」をみるようになったのだ、という^⑥。

しかしながら返礼を期待せずに相手に与えることはキリスト教受容後百年以上を経た現在においてもニウエ人の慣習とはなり得ていない。牧師 Paea は日曜礼拝でさかんにキリスト教の「愛」を説教し、また、ニウエ唯一の新聞 *Niue Star*（断続的ではあるが週一回発行。A4 版、8～16 頁。英語とニウエ語から成る）の「今週の思索」欄でもしばしば話題にしている。

例えば 1995 年 5 月 12 日の同欄で“More Blessed to Give”という表題の下、「使徒行伝」第 20 章第 35 節からイエスの言葉「受けるよりは与える方がさいわいである」を取り上げている。これは「ルカによる福音書」第 14 章第 12～14 節のよく知られた言葉である、

「午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持ちの隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ、宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう^⑦。」

と同じ原則を物語ったものである。Paea は、宴会や食事に親族やごく親しい友人を招くわれわれ（ニウエ人）は主のこの言葉を実践しているとは言えないし、われわれは祈りにすら深い欲望を充足させる利己的な目的を込めていると述べ、「自らの利益を貪欲につかもうとするよりも、他人のことを考え、喜びをもって与えることを考え始めようではないか」と説教している^⑧。

このようにニウエのキリスト教会は、キリスト教の「愛」をポリネシア伝来の *fakaalofo* 概念に含めて「愛」を説教してきたが、人々の間では依然として伝統的な *fakaalofo* 概念が確固として定着している。それは伝来の *fakaalofo* の理念がこの社会の存立にとって重要な意義を持っているからにはかならない。

ニウエのような小島嶼社会において *fakaalofo* の表現である互酬的交換は如何なる社会的機能を持っているのだろうか。

第二章で述べたように、この社会で生きてゆくには生活・生産のための組織と手段、すなわち親族組織と土地が絶対的に必要である。親族集団を維持し、土地を保有し続けることが至上命令なのだ。土地は親族集団の所有であるから、生活を成り立たせるには正しい親族行動をとることによって親族集団のメンバーシップを確保しておかなければならない。有形・無形の財の分かち合いや贈与交換を不断に繰り返すことによって親族との関係を維持、強化あるいは再生し、親族ネットワーク

クの中に確実な地歩を占めておかねばならないのである。

第二に、コミュニティとしての村落の統合にも互酬性は不可欠である。現在の村落はいくつかの親族集団を包摂してひとつの行政単位となっているが、単なる便宜上の行政的単位ではない。キリスト教受容後、内陸のブッシュから沿岸地帯に誘導されて複数の親族集団が現在の村落の教会の周囲にそれぞれ集住した後、そうした親族集団は長年月の間に通婚を繰り返してきた。そのため親族関係は複雑に入り組んでいる。それとともに一村落を構成する諸親族集団は村落コミュニティへの強固なアイデンティティを発達させた。ラグビーやクリケットなどのスポーツ、歌舞音楽、村内美化運動、その他数多くの村落対抗戦はかつての部族間戦争を髣髴させるほどである。

人々は村の教会を中心としたコミュニティ活動に時間とエネルギーの多くを割いた生活を送っている。そしてそこでの評価によって村落代表の国会議員となる道が開かれる。村落コミュニティは村落から選出された一名の国会議員を中心にコミュニティ全体の福利の向上を目指しているのである。親族集団を超えた村落全体の統合が現代ニウエ社会にとっては肝要であることが指摘される。

村落コミュニティにおける互酬的交換は人々の社会関係を維持、強化する手段となるから、人々の結束を強め、コミュニティ内の共同労働を促進し、相互扶助を含めた全体の福利を保障する力となる。*fakaalofa* にはコミュニティ統合のために不可欠な文化的価値があるといえよう。

このように親族集団やコミュニティの仲間との共同性や相互扶助を通して個人のニーズは勿論、個人の目標成就を果たすことが期待されている。集団目標が優先され、個人の利益追求には高い価値は置かれていない文化なのである。

小さな集落を作り密集して住んでいる島嶼社会では、人々は物理的近接性により、日々の絶え間ない交流が不可避である。生活スタイル、生活行動の特徴、日々の行動予定、家族メンバーや親戚の生老病死等々にいたるまで互いに熟知しているといってもよい。互いに他者あるいは他の家族のわずかな変化をも敏感に察知するであろうことは容易に推察できる。さらに、最近に至るまで通婚圏がほぼ同一の村落内に限られていたため、村落内の人々の血縁関係は複雑に入り組み、ほとんどの村人が何らかの親族関係にある。そのため、村人は互いの成育史のみならず家族的背景や家族の歴史にまで精通している。このような条件下ではプライバシーは極小化され、噂話やゴシップが横行しやすい。

このように小集団における極めて距離の近い交流は必ずしも親密さばかりを生ずるとは限らず、集団の秩序をかき乱すこともある。*fakaalofa* による互酬的交換はこのような状況下で人々の行動を統制するインフォーマルな圧力となる。

個人の欲望に忠実に従い集団のゴールに無関心な吝嗇家は、互酬性という集団の原理に沿わない行動をとることによって評判をおとし、それがいわばスティグマとなって社会的に孤立する。*fakaalofa* 原理は小島嶼社会における社会統制のひとつの方途ともなっているといえよう。

第四は限られた資源しか持たない小規模な島嶼社会の存続のあり方と関連を持つ事由である。

ニウエのような小規模な平等主義社会では、平等主義のエトスのため、突出した個人の出現を抑制するメカニズムが必要であり、財が偏在せぬようあらゆる機会を捉えて財の移動すなわち交換を促す。日常生活における食物の分かち合い、その他の財の交換や貸借、手間や技術の交換を寛大に行うことによって *fakaalofa* を表現することが期待されているが、これらは相互的、互酬的なものであるから、贈られた側が過大な謝意を示すこともなければ贈ることが彼の社会的地位上昇に資するわけでもない。*fakaalofa* 原理に基づいた行為なのである。

次の諺にニウエの *fakaalofa* 理念が表現されている。

“Tolo e tau mena fakaalofa kehe vai, to liu ke mafuta mai a taha aho.”

(Throw your gifts into the water, it will rise one day.^⑩)

これは「物惜しみせずに気前よく与えよ」という社会的規範、道徳的責務を意味している。それに対して同価の返礼が遅くない時期に保障されているというわけではない。しかし、将来、こちらが真に必要となった時には必ずや返礼に相当する物を受け取らるだろう、と教えている。すなわちニウエにおける互酬的交換は、AからBへ贈与が行われると程遠からず機械的に等価の物がBからAへ返礼されるというものではない。つまり二者間で負債を帳消しにするようなレヴィ＝ストロースのいう限定交換によってバランスをとっているわけではないのである。

彼らにとって“バランスをとる”ということは市場経済におけるようにやり取りされるモノの等価性ではなく、与える側の持つ資源（財、人力、技術等）と持たざる者の必要性のバランスをとるということを意味する。互酬的交換における妥当性は、ボランニーの言うように、「正当な人間が、正当な機会に、正当な種類のものを返す」^⑪ことによって示されるのである。従って、持てる者が持たざる者へ分与するのは道徳的責務であり、その寛大さゆえに威信が上がるというわけではない。かえって、分与しないことは規範に反することであり、社会的制裁の対象となるのだ。

また日常生活における消費財、その他生活資材の贈与交換、通過儀礼などにおける親族組織やコミュニティ・レベルにまでおよぶ互酬的交換は場合によっては投資行動となるであろう。当座余分な食糧や労働力の費消先となるかもしれない。「ニウエ人の銀行は親戚や友人である」と言われているように、しばしば起こる早魃やサイクロン等の自然災害、あるいは疫病による生産低下にあっても、人々の生活・生存、そして集団やコミュニティの存続を保障する、いわば保険システムとなる。

「*fakaalofa* の原理はニウエ人のコミュニティを結合させてひとつの動態的な集団にする金の鎖である」という^⑫。ニウエ社会の存在様態を表す重要な概念が*fakaalofa* であり、それは集団、コミュニティの統合をもたらす互酬的交換という行為に表現されることを述べてきた。

ニウエ社会のすみずみにまで浸透している *fakaalofa* の強調は人々に協力や協調を促し、個人的欲求や野望をおさえよ、と強い圧力をかける。この圧力に不満を持つ者もあり、抗うことの難しさに屈する者もいるが、大多数はこのシステムで得られる見返りを高く評価している。*fakaalofa* という共同性の原理は、隆起珊瑚礁島の限界ある資源の下での小規模社会という環境に潜在する厳しい自然との緊張関係の中で生存するのに望ましい社会関係をつくりだしているといえよう。

しかしながら、グローバリゼーションの下では伝統的価値観に依拠した孤立的な microcosm が存続するのは困難である。ニウエの場合は自由連合関係にあるニュージーランドからの財政援助によって、貿易を可能にする産業がないにもかかわらず、自給自足的社会を保ってきた。しかしニュージーランド政府は昨今、財政援助の削減を打出してきており、ニウエ政府は経済的自立を迫られている。今ひとつは、周辺先進国への出稼移民現象の中でニウエも 1960 年代以降、徐々にニュージーランドへの移民人口が増加しているが、およそ 10 年周期で襲ってくる巨大サイクロンのために島は壊滅的な被害を受け、その度に人口の流出が激増する事実である。これらのことは今後ニウエの社会を大きく変容させずにはおかぬであろう。この点については稿を改めて論じたい。

【註】

1. ポリネシア語は単一の言語で各島の言語は一種の方言である。*fakaalofa* はニウエ等で、*aloha* はハワイ

- 等で、*alofa* はサモア、ノヌメア等で使われている。
2. 島の現地語の他、宗主国であった国の言語を公用語としている。従って英国の植民地・保護国であった島は英語と現地語が公用語で、島民のほとんどが bilingual である。
 3. モリス 1989 p.147
 4. アウトカ 1999 p.35
 5. ニウエ島の村落および親族組織については馬場 (1996), 同 (1999) 参照。
 6. 1902 年、ニュージーランドの統治下でニウエはクック諸島の管轄下に入った。同年、「クック諸島等法」(Cook and Other Islands Act) によりニウエにも土地法廷の設置が規定された。しかし実際にそれが機能するのは第二次世界大戦後のことである。
 7. Vilitama 1982 p.92
 8. Faitala 1983 p.11
 9. Walsh & Trlin 1973 p.71
 10. 従って彼らが “owner” と言い表す時、正確には所有者ではなく使用権を確保している者を指す。
 11. Pihigia 1977 p.38
 12. 土地継承方式の変化については馬場 (1999), 同 (2001) を参照。
 13. 馬場 2001
 14. 過去 14 年間の統計によると、国庫収入の平均 37.7% をニュージーランドからの援助によっている。最高は 63.3% (1995/96), 最低は 17.8% (2000/01)。“Niue Government-Budgetary Information” July 2006
 15. Crocombe 1977 p.49
 16. Faitala op.cit., p.44
 17. Ibid., p.59
 18. マリノフスキー 1980
 19. ポランニー 1975
 20. Sahlins 1965 p.141
 21. Sahlins op.cit., pp.141-142
 22. ポランニー op.cit., p.381, 1984 p.97; Sahlins op.cit., pp.142-145
 23. 最近結婚式の宴会は地元のレストランを借り切って行う場合もできた。
 24. *Niue Resource Book* 1978 p.27
 25. Ibid., p.28
 26. Makani 1993 p.46
 27. Paea (ATL/MSY-4903)
 28. Loeb 1985 (1926) pp.157-162
 29. 小高い場所に 50~70 フィート×20~40 フィートの広さの台状の構造物を設え、そこを *mata fai tuga* と称した。Ibid., p.174
 30. ニウエの首長制度については馬場 (2005) を参照。
 31. Loeb op.cit., p.174
 32. Ibid.
 33. Faitala op.cit., p.64
 34. *Niue Resource Book* op.cit., p.30
 35. Loeb op.cit., pp.115-116
 36. Paea op.cit., p.59
 37. Ibid., p.60
 38. 新約聖書 p.114
 39. Paea op.cit., p.7
 40. Faitala op.cit., p.58
 41. ポランニー 1984 p.94
 42. Faitala op.cit., p.58

[参考文献]

- アウトカ, G. 他 『アガペー 愛についての倫理学的研究』 茂泉昭男他訳, 教文館, 1999
- 馬場優子 「ニウエ島の村落生活」『大妻女子大学紀要—文系』第 28 号 1996
- 同 上 「ニウエ島の土地紛争を通して見た血縁集団の動態」『大妻女子大学紀要—文系』第 31 号 1999
- 同 上 『『伝統』から『近代』へ—南太平洋ニウエ島における土地保有制度『近代化』への逡巡』『大妻女子大学紀要—文系』第 33 号 2001
- 同 上 「南太平洋の一無階層社会におけるキリスト教受容過程」『大妻女子大学紀要—文系』第 37 号 2005
- Crocombe, R. “Current Problems and Attempted Solutions” Kalauni et als. *Land Tenure in Niue*, University of the South Pacific, 1977
- Etuata, I. & Tanaki, P. “The Wisdom of Niue” Chapman et als. *Niue: A History of the Island*, University of the South Pacific, 1982
- Faitala, P. “Christianity in the Niue Context” A Thesis Presented to the Faculty of the Pacific Theological College in partial fulfilment of the requirements of the Degree of Bachelor of Divinity, 1983, (unpublished)
- レヴィ=ストロース, C. 『構造人類学』荒川幾男他訳 みすず書房 1972
- Loeb, E.M. *History and Traditions of Niue*, Bernice P. Bishop Museum Bulletin No. 32 (1926), Kraus Reprint 1985
- Makani, K. “Ekalesia Niue : An Indigenous Church in the Making” A Thesis Presented to the Faculty of Pacific Theological College in partial fulfilment of the requirements of the Degree of Master of Theology in Pacific Church History, 1993, (unpublished)
- マリノフスキー, B. 『西太平洋の遠洋航海者』寺田・増田訳 中央公論社 1980
- モリス, L. 『愛 聖書における愛の研究』佐藤勝彦他訳 教文館 1989
- Niue Resource Book* Niue Education Department 1978
- Paea, A. “Thought for the Week” *Niue Star* 12 May, 1995 No. 31-3
- 同 上 “A Study of Niuean Christianity and its Theological Thought” (ATL MS-Papers-4903)
- Pihigia, T. “Supernatural Protection of Niuean Island” Kalauni et als. *Land Tenure in Niue*, University of the South Pacific, 1977
- ポランニー, K. 『経済の文明史』玉野井・平野編訳 日本経済新聞社 1975
- 同 上 『人間の経済 I ——市場社会の虚構性——』玉野井・栗本訳 岩波現代選書 1984 (1980)
- Sahlins, M.D. “On the Sociology of Primitive Exchange” Banton, M. ed. *The Relevance of Models for Social Anthropology*, A.S.A. Monographs 1, Tavistock, 1965
- 新約聖書 (1954 年改訳) 日本聖書協会 1964
- Vilitama, H. “Traditional Politics” Chapman et. als. *Niue: A History of the Island*, University of the South Pacific, 1982
- Walsh, A.C. & Trlin, A.D. “Niuean Migration: Niuean Socio-Economic Background, Characteristics of Migrants and Settlement in Auckland” *Journal of the Polynesian Society* 28-1, 1972